



クールな生徒会長は
パイロット候補生

エッチで乱れるほど

シンクロ率アップ!

立ち読み版

上田ながの
[挿絵] あめとゆき

序章	パートナーは生徒会長	006
一章	会長と同居生活	018
二章	会長の口の中に……	049
三章	濃厚接触	075
四章	僕は諦めない	108
五章	エッチな毎日	152
六章	私を信じろ。私はキミを信じるから	201
終章	ずっと一緒	235

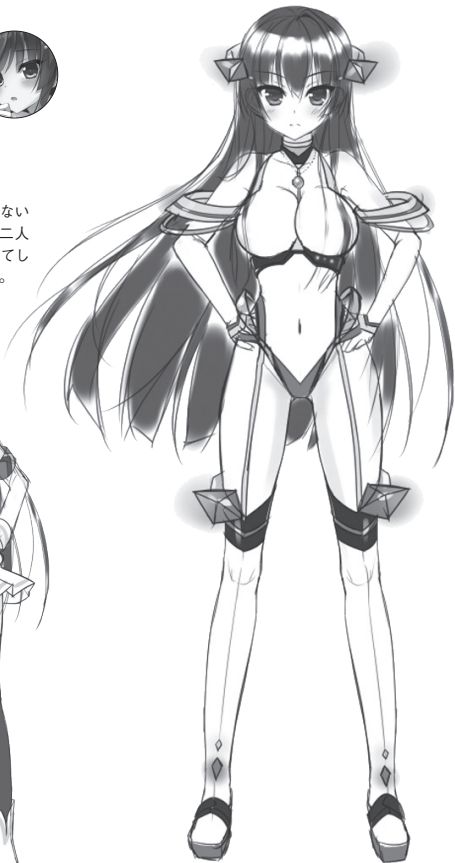
登場人物紹介

Characters



くろひつぎりん ね
黒棺 凜音

常にクールで感情を乱すことのない生徒達の憧れの的。操縦者が二人必要な「防人」を一人で動かしてしまえるズバ抜けた才能の持ち主。



ふ そうあかつき

扶桑 暁

父親の跡を継いで「防人」のパイロットを目指す少年。座学の成績は優秀だが実技の成績は学年最低。

三章 濃厚接触

「はああああ……結局今日も上手くいかなかった」

防人実機を使つての訓練が始まってから既に一週間が過ぎている。訓練初日以来、授業だけでなく毎日の様に居残つて凜音と共に特訓も行つてはいるのだけれど、成果を上げることはできずにいた。

「すみません会長。僕が全然駄目なせいで」

凜音に対して申し訳なさをどうしても感じてしまい、謝罪する。

「別に駄目なことなどないさ」

しかし、凜音は別に気にしているような素振りは見せない。パートナーは結果が出せない自分に対しても優しかった。

「確かに失敗ばかりなことは事実だが、扶桑の操縦技術は着実に一週間前よりも上がっている。それにシンクロ率だつて遂に四八パーセントを超えただろ？」

「それは……まあ……」

共同生活のお陰なのか？ それともエッチなことをしてもらっているお陰なのか？ 原因は分からないけれど、確かに凜音がいうとおり数字も上がってきてはいた。

「でも、それでも……上手くいってないことは事実です。ほんの少し数字が変わったとこ

ろで、僕は会長の足を引っ張ってる」

「そんなことは」

「事実ですよ。だから雅堂にだって……」

今日の訓練後のことを思い出す。

共に実機訓練を行った雅堂から、

「やはりお前は会長に相応しくないな。所詮は底辺ということだ。それを自覚しろ。会長という才能の塊を潰すつもりか？」

などという言葉を向けられてしまったことを。

実に嫌みな言い方だった。

それでも言い返すことはできなかった。何故ならば、彼の言葉は事実だったから。

実際自分は凜音の足を引っ張ってしまっている。もしかしたら歴史に名を残すかも知れないとまでいわれるパイロット候補生の足を……。

そんな風にくよくよしてしまふ暁に対し、

「彼の言葉は気にするな。まだ訓練は始まったばかりなんだからな。第一、悩んでいる暇があつたらシンクロ率を上げる努力をするんだ。分かっているとは思うが、シンクロ率が上がれば上がるほど、心臓が供給するエネルギーによって増していく機体出力に対する脳の適応能力も上がる。適応能力が上がれば、当然操縦に対する負担も軽くなるんだからな。そういうわけだから……今日も始めるぞ」

などという言葉を向けてくると同時に、凜音はこちらの身体を室内に置いてあつた椅子に座らせてきた。同時に実に器用な手さばきで、こちらのズボンを脱がせてくる。

「か……会長！ 今はそんな気分じゃ」

「気分とかそういう問題じゃない。これもパイロットとして大成する為だ」

慌てて凜音の行動を止めようとするけれど、パートナーはそれを聞いてはくれなかった。ズボンだけでなく下着まで脱がされ、肉棒がさらけ出される。

「いつ見ても逞しいペニスだな」

剥き出しになった男性自身を普段と変わらぬ表情で見つめてきた。

「は、恥ずかしいですよ。見ないで下さい。その、今日は……」

初めて手淫をしてもらつた晩以来、毎日の様に凜音に手扱きや口淫で抜いてもらつている。シンクロ率を上げるといふ名目で……。

だというのに羞恥は消えない。美しい先輩に自分の秘部を愛撫されるという状況に慣れることができない自分がいた。だからやめてくれと訴える。

だが――

「見ないで？ 嘘をつくな扶桑。キミのペニス……私に見られた途端、大きくなり始めているぞ。これはして欲しいということではないのか？」

という凜音の言葉どおり、彼女の視線を感じているだけでペニスは膨張を始めてしまう。確かに、して欲しいと訴えているみたいだった。

「それは、その……」

自分でも違うと否定することができない。明らかにこれからしてもらおう行為に対して、期待を覚えてしまっていた。

「キミは正直者だな。よし、たっぷり今日も気持ち良くしてやる」

凜音はこの期待に応えるようにそう呟くと、暁の前に跪くと共に――

「んっちゅ……ちゅううっ」

初めてフェラしてくれた時の様に、躊躇なく勃起した肉槍の先端部に口付けをしてくれた。もちろん、一回だけではない。

「ふちゅう……。ちゅっちゅっ……。むちゅううっ」

二回、三回、四回と何度も何度も口付けしてくれた。その上で舌を伸ばし、肉棒全体を丹念に舐め回してくる。

「まだ……シャワー浴びてないです。汚いですからそんなに舐めちゃ」

「ちゅれるっ。れるおおお……。んふふ、キミの身体を汚いだなんて思わないさ。まあ、多少いつもより匂いはあるが、男らしさも感じる。嫌いではない。だからほら、こんなことだってできる……。んあっ。もっ……。んもおおっ」

当然舐めるだけで行為は終わりじゃなかった。口を開き、肉棒を咥え込んでくれる。

「んっじゅ……。もじゅうう！ ちゅっぽ！ じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼおおっ」
卑猥で下品ささえ感じさせる音色が響いてしまうことも厭わ^{いと}ない。痛々しい程に口を大

大きく開きつつ、頭を上下に振って肉棒全体を口腔で扱きあげてくれた。

しかも、今日の行為はこれで終わりではなかった。

「んっぽ……んじゅううっ……ちゅぽんっ……はあっはあっはあっ……。ふふ、さて、今日は口だけじゃない。ここでもお前を気持ち良くしてやるぞ」

口腔からペニスを引き抜くと、口と亀頭の間は何本もの唾液の糸を伸ばしつつ、そのような言葉を喉へと向けてきた。

同時に身に着けていた軍服の胸元を開ける。黒いブラが剥き出しになった。このブラも外してみせてくる。ブルンツと弾むように乳房が剥き出しとなった。

「凄い」

大きいけれど張りのある乳房。白い肌にピンク色の乳頭というコントラストが実に鮮やかで美しい胸——思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

「男子は乳房が好きだと聞いたことがある。扶桑も胸が好きか？」

「あ……それは……その……」

改めて問われるとなんだか恥ずかしく「はい、好きです」とは答えられない。

「そうか。ふふっ」

しかし、凜音は察してくれる。

珍しくちよっと楽しげな笑みを口元に一瞬浮かべると共に——

「ほら、こんなのはどうだ？ んっ」

グニュッと大きな乳房で、口淫で唾液塗れまみとなったペニスを挟み込んでくれた。

「くあっ！」

柔肉の海の中に肉棒が沈み込んでいく。肉茎全体に乳房が絡みついてくる様な感覚だった。下半身が溶けてしまいそうな心地良さに、思わず声を漏らしてしまう。

「気持ち良さそうな顔だ。感じてくれてるんだな。嬉しいよ。でも、この程度で満足はするなよ。もっと……もっと気持ち良くしてやるからな」

「も、もっと?」

「そうだ。こういうのがいいんだろ? んつく……。んっ! んっんっんっんっんっ……」

こちらの疑問に答えるように乳房を両手で支えると、左右から強く圧迫感を与えてきた。その上で上半身をくねらせ始める。グジュッグジュッグジュッグジュッと胸で肉棒を抜き始めてきた。

「あ、い……いいです! これ……凄くいいっ!!」

途端に快感が全身に広がっていく。ほんの数度擦られただけで射精してしまいそうなくらいの肉悦を覚えてしまう。

「凄いぞ。扶桑……キミのペニスが動いているのが分かる。んんんっ! んっふ……くふううっ……。私の胸の中でビクビク震えているぞ。気持ちいいのか? 感じているのか?」

「はい。感じてる。感じてます! すぐに……くうう……出ちゃいそうです」

性感を否定することなどできなかった。暴発しそうな程の射精衝動に耐えつつ、何度も

首を縦に振る。

「そうか。いつでも射精していいからな……んっちゅ……むちゅっ！　ちゅぼっ！　もっもっ……んもおおっ」

そうして快感に身悶える暁に更に大きな愉悅を刻み込もうとするように、凜音は乳房の間から顔を出すペニスの先端部を咥え込んできた。

「なっ！　うあっ！　それ……くあああっ！」

肉茎を乳房で、龟头を口腔で愛撫されるという状況に、これまで以上の快樂が全身を駆け巡っていく。あまりの心地良さに肉棒だけでなく、全身をビクッビクッと電流でも流されたみたいに震わせた。

「もじゅっぼ……ちゅぼっ！　んじゅっ！　じゅずるるるるう」

そんな暁を更に責め立てる様に、ただペニスを咥えるだけではなく、頬を窄めて吸引まで行ってくる。上目遣いでこちらの反応を見つめつつ、どこか下品ささえ感じさせるほどに唇を突き出す凜音——普段の彼女からはまるで想像もできない姿に、下腹部から熱いマグマの様なものが肉先に向かってわき上がってくるのを感じた。

「で……出る！　もう、出ますっ!!」

限界が訪れる。凜音の口内で龟头を不気味な程に膨れ上がらせた。

「いいじよ……らしえ……らしゅんら！　んっじゅ……ちゅずずずうっ!!」

これに応えるように吸引をより激しいものに変えてくれる。これまで以上に強く乳房で

肉茎を挟み込んでくれる。

刹那——

「くあっ！」

どびゅっ！ どびゅびゅ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅ——どびゆるるるう！
「もっこ！ むぼおおおっ！ おっおっおっ——んぼおおおっ!!」

瞬は射精した。身体中が弛緩しそうなほどの性感と共に、濃厚な白濁液を口腔へと……。最近では毎日二回以上射精しているというのに、濃さも量も我ながら尋常ではない。一瞬で凜音の口腔を満たしてしまうほどだった。

けれど、パートナーはそれをすべて受け止めてくれる。ドクッドクッドクツというペニスの痙攣に合わせる様に肢体をビクビク震わせつつ、いつもそうしてくれているとおりの最後の一滴まで肉汁を口腔で受け止めてくれた。

「んっふ……ほふううう……。んっぎゅ……。んぎゅっ！ ぎきゅっぎきゅっぎきゅっ……んぎきゅううっ」

しかも、飲んでくれる。

「げっほ……げほっげほっげほっ……あっふ……ふはああああ……けぷううっ」
幾たびも咳き込みつつも、すべてを飲み干してくれた。

「はあっはあっはあっ……今日も、たくさん出たな」

やがてすべてを飲み干した凜音が、口端から精液を零しつつそう呟いてくる。



った掌を自分の口元まで持っていていき——

「んっちゅ……。れろっ……。ちゅれろっ。れろっれろっ……。んれろお」

それを舐め始めた。

卑猥な音色を奏でながら、暁の耳元で精液を……。

「あ……。だ、駄目ですよそんなことしたら」

「んっふ……。むふううっ……。はああああ……。別に駄目なんかじゃないさ。折角キミが射精してくれたものを洗い流すなんてもつたいたないだろ？ ほら、可能性だけでしかないが、こうして身体から放たれた精を取り込めばシンクロ率アップにも繋がるかも知れないからな。んっく……。んちゅずっ……。ちゅるるるるう」

指の一本一本を舐めしゃぶってみせてくる。その動き一つ一つが実に卑猥だった。射精を終えたばかりだというのに、どうしようもないくらいに興奮を覚えてしまう程に。

もつとしたい。もつと凜音とエッチなことをしたい——などということを自然と考えてしまう。

だからだろうか？ 気がつけば暁は腕を動かし、背後に立つ凜音の尻に触れてしまっていた。

「んっ！」

途端にビクンッと凜音は肢体をはねるように震わせる。

「扶桑、何をする！」

声を荒らげてもきた。

「え？ あ……その……これは……」

この声で暁は正気に戻る。とんでもないことをしてしまったと思った。

「ただ、同時に思う。一瞬触れただけでしかないけれど、凜音の尻の感触はとても気持ちよかったなあ——と。」

もっと触れたい。凜音に触りたい。尻だけじゃなく、胸や括れにだって……。

などということも考えてしまう。

だからだろうか？

「ぼ……僕も……僕も会長の身体——パイロットスーツを洗ってもいいですか？」
気がつけばそんな言葉を口にしていた。

「なにっ？」

瞬間、珍しく凜音が驚くような表情を浮かべた。

「洗う？ 扶桑が私を？ 何故？」

「何故ってそれはその……」

触れたいから。自分の手で凜音の身体に——とは、何となくいい難い。では、何と答えるべきなのか？ と一瞬思考した上で出した答えは、

「一方的に僕がされるだけじゃ駄目な気がします。シンクロ率を上げるのなら、僕だって会長に何かしてあげるべきだって。そうじゃないですか？」

というものだった。

「それは……その……」

これに凜音は一瞬口籠もったものの「確かにそうかもな」と納得してくれた。

「それじゃあ、いいですよ？ 僕がその……会長の身体に触れても」

「ん？ ああ……。まあ、そうだな」

「ありがとうございます。それじゃあその、いきますね」

頷くと共に一旦凜音から離れると、今度は暁が彼女の背に回った。

同時に先程パートナーがそうしたようにボディソープを泡立て、自分の身体に塗りたくる。自身の全身を泡塗れにした。

「なんだか緊張するな」

これに凜音がそのような言葉を口にする。

普段あまり動じることのない氷の女神にしては珍しく、なんだか動揺しているように見えた。その姿になんだか新鮮なものを感じる。普段は美しさや気高さを感じさせる彼女の姿が、今回は可愛らしいものに見えた。

だからだろうか？ 胸が高鳴っていく。射精したばかりだというのにペニスが萎えることなく、更に大きく、硬く膨張していく。射精したばかりだというのにペニスが萎えるこ

触れたい。凜音の身体を自分の好きにしたい。

そんな本能の赴くままに凜音の背中にグチュッと自分の身体を密着させる。もちろん勃

起したペニスも腰に押しつけた。

「くっ」

僅かに凜音は身体を硬くする。なんだか緊張している様にも見える反応だった。普段攻めてばかりで自分がされることがなかったから、慣れない状況に戸惑っているのだろうか？ そのような姿により興奮が高まっていくのを感じつつ、先程凜音がそうしたように、凜も全身をくねらせ始める。泡塗れの身体で凜音の背中をグチュッグチュッと擦った。もちろん、これだけで終わるつもりはない。

「前も綺麗にしますね」

「いや、ま、前は別に……」

と、凜音は止めてきたけれど気にせず、背後から凜音の身体を抱き締めた。そのまま腰回りを掌で擦っていく。

「んんっ……。くっふ……。んっ……。んっんんっ」

グチュッグチュッグチュッと音色と共に肌にピッタリと密着したスーツを撫でると、凜音は少し熱い響きの籠もった吐息を漏らし始めた。

（この息……。なんだかエッチだ。こんな吐息をもっと聞きたい）

自然とそんなことを考えてしまう。

その欲求に凜は逆らわない。というよりも逆らえなかった。

わき上がる感情のままに、腰だけでなく太股も撫で回す。更には括れを指先でなぞって

いき、遂には乳房にも触れた。指先にグニユツと柔らかな感触が伝わってくる。

「あっ」

途端にこれまでよりも大きな声を凜音は漏らした。

「か……会長っ!!」

その声を耳にした途端、プツンツと頭の中で理性の糸が切れる。

思考が劣情に支配されていくのを感じつつ、ただ指先で触れるだけではなく、掌で凜音の大きな乳房を包み込んだ。指をパイロットスーツに包み込まれた柔肉に食い込ませていく。

「んんっ！ あ……暁……それはっ！」

「会長！ 会長っ!!」

凜音は止めようとしてくるけれど、聞き入れる余裕など存在しない。

掌に収まりきらない程大きく、それでいて心地いい反発を感じる感触を堪能するように、暁は指を蠢かし凜音の乳房を揉んだ。

捏ねくり回すように柔肉を刺激する。指と指の間からはみ出す程の乳肉に、何度も何度も刺激を加えていった。身体を——というよりも、凜音の腰に押しつけたペニスをくねらせながら……。

技巧も何もあったものじゃない。ただ本能のままの愛撫である。

「んんっ！ んつく……あっ！ んんんっ……んんんっ……んんんっ……んんんっ」

それでも、どこか心地よさげな声を凜音は漏らしてくれた。

いや、反応は声だけでは終わらない。

(これ……勃ってる。勃起してる。会長の乳首が……硬くなってる)

パイロットスーツの乳頭部分が内側からポチッと盛り上がっていることに気付く。指でこれに触れると――

「あんっ」

これまで以上に激しく凜音は反応を示した。

(エッチな声だ。会長……感じてるの？ 僕の手で会長が?)

どんなにエッチなことをしている時でも常にクールな表情を崩さない凜音が、甘い悲鳴を漏らしている。そんな事態に曉は肉体がより昂たかぶっていくのを感じた。

感じさせたい。凜音を――そんな感情が膨れ上がっていく。

だから曉は更に指を蠢かせる。

指先で乳頭を転がす。時には押し込み、時には人差し指と親指で摘まむと、クリクリと刺激を加えたりもした。

「あつふ……。んんっ！ んっんっ……んふううう」

この愛撫に対して凜音はくぐもった吐息を漏らす。

どうやら唇を引き締め、嬌声を抑えようとしているらしい。

甘い悲鳴を聞きたかった曉には少し残念なことだった。けれど、これはこれで興奮をか

き立てられる。何しろあの凜音が自分の愛撫によって声を抑えなければならぬ状態に陥っているのだ。興奮しない方がおかしい。

「会長……感じて下さい！ 会長っ!!」

頭がクラクラする程の劣情を感じつつ、より愛撫を激しいものに変えながら腰を更に大きく蠢かしていく。ぐりぐりとパートナーの腰に強くペニスを押しついたりもした。

そのお陰だろうか？ 射精衝動が膨れ上がっていく。またも精液が溢れ出しそうになる。「扶桑……キミのペニス……んつく……んんんっ！ お、大きくなって、ビクビク震えているぞ。もしかしてこれ……はあ……はあ……あっあっ……。で、出そう……。また、射精しそうになっているのか？」

そのことに凜音にも気付かれてしまった。

「は……はい……。出そう。出そうです。また僕……射精しちゃいそうです」

素直にこれを認める。今更否定なんかできないから。

出したい。射精したい——抑え難い程に本能が膨れ上がっていく。

「そうか。なら、出しているぞ。んんんっ……が、我慢する必要なんかない。たくさん射精するんだ。ほら……こういうのはどうだ？ んつく！ んんんっ！ んんんっ！ んんんっ！」

ぐっちゅ、ぬちゅううっ！ ぐっちゅぐっちゅぐっちゅっ……。

こちらの動きに合わせるように凜音も腰を動かしてくる。お尻の谷間で暁のペニスを挟み込むと、卑猥な音色が響くことも厭わずに激しく腰を振ってきた。



暁は一人じゃない。私だって一緒なんだからさ」

そういつて凜音は笑った。

「凜音さん」

その笑顔に一瞬見惚れる。

「キミは私を信じる。私はキミを……扶桑暁を信じるから」

そう語りつつ凜音はこちらの手を取ると、グイッと抱き寄せてきた。そのまま「んっ」とキスをしてくれる。

(なんか……これって男女逆じゃないか?)

なんてことを思ってしまうようなシチュエーションだった。

それでも彼女の気持ち嬉しい。それにキスは心地良かった。

「どうだ? 私を信じてくれる気になったか?」

唇を離し、そう問いかけてくる。

「凜音さん……んんっ」

そんな彼女に対し、言葉での答えの代わりに、今度は暁の方からキスをした。

そのままコックピット内で「んっちゅ……。ちゅうっ! ちゅっちゅちゅっ」と、繰り返すキスをする。最初は啄む様な軽いキスを。やがては――

「んっじゅ……。ちゅずるっ! ぐちゅるっ! んっじゅ! ちゅっちゅっ……。むじゅるるるうううっ」

互いの口腔に舌を挿し込み、グチュグチュと口内を貪り合った。

舌と舌を絡め合い、唾液と唾液を交換し合う。卑猥ささえ感じさせるような水音を、ピチャピチャと狭い空間に響かせ合った。

エッチを行う前にはいつもしている濃厚な口付けである。

だというのにどうしてだろうか？

「な……んっふ！ んっ!? んっんっんっ——むっふ！ くふっ！ んんんんっ」

なんだか凜音の反応がいつもと違った。

ただ口付けしているだけではないというのに、ビクビクと肢体を震わせ始める。

(どうしたんだらう？ でも、なんか……こんな姿もつと見たい)

明らかにおかしい。何かが起きていることは間違いないだろう。でも、苦しかったり痛かったりというわけではないらしい。というよりも、なんだか性感を覚えているようにも見える姿だった。

ぐちゅるっ！ ちゅっず……。むじゅるるる！ ちゅぶるっ！ ぐっちゅ……んちゅううっ！ ちゅっちゅっちゅううううっ！

だからだろうか？ 更に喉は舌をくねらせる。もつと感じて欲しい。もつと感じる姿を見せて欲しい——とでも訴えるみたいに、舌を吸り、唾液を流し込み、艶やかな唇を吸引したりした。

「んんん！ むっふ！ んふううっ！ んっんっんっ——むふうううっ♥♥♥」

やがて凜音はこちらの身体を強く抱き締めてくる。同時に全身を痙攣させた。口付けしたまま心地良さそうに表情を蕩かせながら、肢体を一瞬硬直させる。ただ、それはあくまでも一瞬であり、次の刹那には、

「んっは……はああああ……。はぁー♥ はぁー♥ はぁああああ♥」

と鼻にかかった熱い吐息を漏らしつつ、ぐったりと全身から力を抜いていった。

「え？ なに？ 凜音さん……もしかして……い、イッたの？」

まだキスをしただけでしかない。愛撫さえもしていないのに達した？ そんなことありうるのだろうか？ しかし、絶頂したようにしか見えない反応である。唇を離すと共に思わず問う。

「それは……そ……その……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

これに対して凜音は恥ずかしそうな表情を浮かべつつ、僅かに迷うような素振りを見せた後「あ……ああ。イッた。その……キスだけで……い、イッてしまったようだ」と絶頂を認めてくれた。

「キスだけで……どうして？ まさかまた、あのジェルを？」

先日、二人で晒してしまった痴態を思い出す。

「いや、違う。あんなものには使ってない。多分……このスーツのせいだ」

「パイロットスーツですか？」

「ああ、えっと、その、なんだ……機体とのリンク機能を調整する為に感覚機能強化のシ

ステムを起動させてたことを忘れてた。多分……はあ……はあ……はあ……そのせいで性感まで増幅してしまっていたんだと思う」

「そういえばパイロットスーツにはそんな機能もあったことを思い出す。」

心臓は自身の生体エネルギーを機体に供給するのが役割だ。その為、機体と自身の身体をリンクさせる必要がある。機体が受けたダメージをだいたい緩和はされるとはいえ、自分の痛みとして認識してしまうくらいに……。

パイロットスーツは搭乗者の生存率を高めると共に、そんなリンクの補助をしてくれるものなのだ。

「それにしても、まさか……んつく……はああああ……き、キスだけで達してしまうとはな……。前回のジェルほどではないが、ここまで昂ってしまうものなのか。その……ちよつとすまん、システムを切るから少し待っていてくれ」

未だに顔を赤らめながらはあはあと肩で息をしつつ、凜音はスーツのコントロールを行使おうとする。

「切る？ それは何か……」

もったいない気がした。

見たいと思ってしまう。感じる凜音の姿を……。

ジェルの時は自分もおかしくなってしまうたせいで、愉悦に溺れるパートナーの姿を堪能することができなかつた気がする。だから見たい。快感に悶える凜音を……。

だから――

「凜音さんっ!!」

凜音の身体を再び抱き締めると、

「え? ちよっ! ま……待てっ!」

という制止の言葉も無視して、再び口付けした。

「むむむっ!!」

唐突な行動に凜音は驚いた様に瞳を見開く。こちらから逃れようと藻掻くような素振りまで見せてきた。

しかし喉は彼女を離さない。それどころか抵抗されても気にすることなく、凜音の唇に強く自分の口唇を押しつけた。

「あむっ! くっふ! むんんんっ!!」

再び温かな感触が伝わってくる。正直、感覚機能を強化していなくたって達してしまいうまくないに心地いい感触だった。そんな口唇の柔らかさを堪能しつつ、再び口腔に舌を挿し込む。

「むじゅっ! あっむ……ふじゅうっ! んっんっ……ふんんんっ!」

そんな口付けに更に凜音は抵抗する力を上げてくる。

けれど、ぐっちゅ、又チュウッ! ぐっちゅぐっちゅぐっちゅ――と、挿し込んだ舌で口腔を蹂躪してみせると、すぐに凜音の全身からは力が抜けていった。

「むふうう！ んっんっ……んふうううっ♥」

同時に、重ね合った唇と唇の間から、愉悦混じりの吐息を漏らし始める。

その声に心地良さを感じつつ、暁はより強い快楽を刻み込込む為に、これまで以上に舌を激しくくねらせていった。

いや、舌で口内を蹂躪するだけでは終わらない。

ギシツと凜音の身体を押し倒すようにコックピットシートに座らせると、口付けを続けつつ、その胸元にも手を添えた。

張りのある美しい形をした乳房に、躊躇なく指を食い込ませていく。

「んっふ！ んふあつ！ んっんっ——むふうううううっ♥♥♥」

途端に凜音は先程達した時以上に肢体を震わせた。ただ一度揉んだだけでしかないというのに、腰を浮かせ、全身を戦慄わななさせる。同時に鼻から漏らす吐息は、これまで以上に熱感籠もったものとなっていた。

「凜音さん……もしかしてまたイッた？」

唇を離しつつ問う。

「い……イッた？ ば……馬鹿をいうな。こ……はあ……はあ……こんなことでそ……その、い、イッたりなどするはずないだろ。だ……だから……はあ……はあ……どけ。どくんだ。もう、これ以上変なことはす……するな……。その……システムを切るからどくんだ」

しかし、無理矢理されたことで少し怒っているのだろうか？ 凜音は絶頂を認めようとはしなかった。

怒らせてしまったことは正直申し訳ない。ただ、厳しいけれど基本的に怒ったりすることとはなく、ひたすら自分に優しくしてくれる凜音のそんな姿が珍しく、もつと見てみたい、もつと苛めてみたいと思ってしまう。

だから曉は「どくんだ」という言葉を聞き入れることなく、唾液塗れになっているピンク色の唇に、再び口付けした。もちろん舌だつて挿し込む。

「ちよっ！ んっふ！ あっふああっ！ ひゃ……ひゃめるといつへいりゆのに！ こによっ！ んっんっ！ んんんっ！ ら、らめら！ ろけ！ んっちゅ……はああああ……ろ……ろくんらあああ！」

この行為に凜音は当然抵抗してくる。

しかし、二度も達してしまったせいだろうか？ 抵抗はかなり弱々しい。

そんな彼女に更に追い打ちをかけるように、口腔を舌で蹂躪しつつ、再び乳房を揉む。しかも、今度は一回だけじゃない。捏ねくり回すように柔らかな双丘を掌で何度も何度もほぐすように刺激した。

「んっふ！ あふんん！ ら……らっめら……それは……んっんっ！ らっめ……まら……こりえ……まら……んんんっ！ あっふ……んっんっ——んふううっ♡♡♡」

数度揉むとそれだけで凜音は絶頂に至る。壊れた玩具みたいに全身を痙攣させながら、



愉悅に蕩けた表情を晒す。

ただ、それでも「今度こそイキましたよね？」と尋ねる晝に対して……いって……いつてにやど……い……いないぞお」と否定の言葉を向けてきた。

そのように意地を張る姿になんだか可愛らしさを感じてしまう。もつと悶えさせたい。もつと意地を張らせたい——などと思ってしまう自分がいた。

だから休む間もなく愛撫を加えていく。口腔を蹂躪し胸を揉みしだく。

「ふっひ！ んひっ!! はひひひひひっ♥♥♥」

ほんの少し刺激を加えると、それだけですぐに凜音は絶頂に至る。だが、達しても休ませなどしない。達している最中でも容赦なく乳房を揉みしだいた。いや、ただ揉むだけでは終わらない。時には乳首を摘まみ、時にはパイロットスーツの上からであつても気にすることなく、ポチッとスーツが膨れ上がる程に勃起した乳首に舌を這わせたりもした。

「あああ！ 駄目だ……今は！ いまはらめらあああつ！」

「何が駄目なんですか？ もしかしてイッちゃったからですか？」

「ち……がう……いつへ！ わらひは……あああ♥ いつへにゃんか……い……なひっ！ あっあつ……あんんんっ!!」

「ですよ。だつたら続けますよ」

愛撫に愛撫を重ねていく。

遂には乳房だけでは飽き足らず、スーツに染みができるほど濡れそぼった秘部にも舌を

這わせると、これを舐めしゃぶった。

スーツの上から秘裂を舌でなぞり、陰核を指で押し込む。

そんな愛撫を加えるたびに「ふっひ！ あひあっ！ い……いっぎゅ！ あああ！ イッて……いってないけろ……いぎゅううっ♥」という妙な喘ぎ声をあげ、凜音は絶頂し、絶頂し、絶頂した。

それ程の快感を刻み続けたお陰だろうか？

遂には――

「もういっでりゅ！ わらひいっでりゅから♥ あかちゆき……いっでりゅ！ わだひ……いっでりゅんらああ♥ らから……もうっ！ もううううっ♥ あっあっあっ……あーあーあーあー♥♥」

呂律の回らない声で絶頂を認めてまでくる。

けれど、彼女が認めたところで愛撫を止めるつもりなどなかった。

「そうですか。なら……もつと気持ち良くしてあげますね」

もつと感じさせたい。もつと。もつと気持ち良くしてあげたい。もつともつともつと！ そんな想いのままに更に快感を刻み込んでいく。

「んっひ！ らめ！ おかひくなりゅ！ あああ！ しゅごい！ しゅごすぎるうう♥」
肉悦の悲鳴がコックピット内で反響した。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 盗作フリームをルビは10年未満の方購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!